

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『戦略は「組織の強さ」に従う：“日本的経営”の再考と小規模組織の生きる道』

水野由香里 著 | 中央経済社、2018、212pp.

本書は、日本企業は優れた内部資源を保有しながらなぜ競争力を発揮できないのかという問題意識にたち、保有資源に制約のある小規模組織が、小規模組織ならではの特性を活かしてイノベーションを実現していることに着目するオリジナリティの高い研究である。

まず、資源ベースの戦略論を中心に「組織と戦略」に関わる既存研究を整理した上で、アンゾフのマトリックスを援用しつつ、戦略フレームワークを提示する。その中で、既存顧客を対象に新規技術を開発する「顧客フィクスト戦略」、既存技術を活用して新規顧客を開拓する「技術拡張戦略」に注目し、後者をさらに「技術ストレッチ戦略」と「技術スライド戦略」に分類する。そして、7社の事例を丁寧にひもときながら、これらの戦略に対する理解を深めるのである。組織に蓄積されてきた資源が戦略を決定することから、「組織は『戦略の強さ』に従う」ことを改めて確認し、その強さが何によって支えられているかも明らかにしている。中小企業からの学びを、日本的経営の再建を意識して議論している点が新鮮であり、特にイノベーションを実現する組織に関心のある方におすすしたい良書である。

評／『彦根論叢』編集委員／弘中史子

『産業クラスターの進化とネットワーク：ファッション産業クラスター「東大門市場」と「原宿」の比較制度分析』

許伸江 著 | 税務経理協会、2018、240pp.

本書は産業クラスターの中でも、環境の変化を敏感に反映する「ファッション」に着目し、その制度進化を分析している。比較制度分析の枠組みをとりいれ、韓国の東大門市場と、日本の原宿というクラスターを比較しつつ、クラスターの経済主体である企業や企業家の役割とネットワークを観察するという意欲的な書である。

まず既存のクラスター研究をレビューし、歴史的経路性を丁寧にみる重要性を強調するとともに、多くの地域の多様な産業クラスターを分析するには比較制度的な視点が必要であると主張する。続いて、100年あまりの歴史をもつ東大門市場をケースとしてとりあげ、新たな制度が生まれる背景と企業家の役割を明らかにするとともに、生産に必要な機能がすべて一箇所に集中している機能集中型という特徴を見出す。東京の原宿の分析では、常にクリエイティブな企業活動が行われるようになったプロセスを観察し、レストランや美容院といった広義のファッションクラスターの存在を指摘した上で、デザインの企画や文化発信に優れた都市型産業クラスターとしての特徴を明らかにする。調査内容は2000年代初頭のものであるが、制度進化のダイナミズムと経済主体としての企業家の活動を歴史的に振り返って明らかにしており、現在のクラスター研究にも多くの示唆を与えるものと確信する。

評／『彦根論叢』編集委員／弘中史子

